

〈一冊の本〉

石光真清（いしみつ まきよ）著

『石光真清の手記』（全4冊）

中公文庫 2,991円＋税



石光真清は明治元年、現在の熊本市本山で細川藩士の四男として生まれた。軍人への道をめざすが、特にロシアにたいする関心を強め、留学する決意を固める。留学先はシベリアにおけるロシア軍最大の根拠地ブラゴヴェヒチェンスク。

ところが彼はそこでとんでもない大事件に遭遇する。アムール河をはさんでロシアと清国は対峙していたが、ある日、十数名の清国兵がロシア汽船に停船を命じた。たったそれだけのことだったのだが、噂が噂をよび、ついにロシア軍はブラゴヴェヒチェンスクにいた3千人ほどの清国人にたいし、徹底した報復に出た。清国人たちはアムール河畔に集められ、片っぱしから虐殺されて濁流のなかに捨てられたのである。石光は、「東亜における有史以来最大の虐殺」と驚きを隠さない。

同時に、この事件は石光の人生を大きく変えるほどの重みを持った。『手記』はこう述べる。「これをきっかけに怒濤のようにロシア軍が全満洲に殺到して、ついに私自身もまた東亜の混乱に巻きこまれてしまった。私はこの地に留学するについて、特別任務を志願したわけではなかった。しかし歴史の流れ、時のゆきがかりは、疾風のように私を巻きこんでしまったのである」と。この「特別任務」とは諜報活動のことである。

彼は対ロシア諜報活動にたずさわることを自ら志願する。菊地正三と名のってハルビンに菊地写真館を開き、重要施設の写真を日本軍にわたすのである。しかもその場合、彼は自分の失敗が国家におよぶべきではないとして軍籍をはなれ、いかなる保護も得ることのない一個人として活動している。つらい体験も山ほどあった。

日本に戻り久しぶりに再会した長男から「お手伝いをしますから僕を中国に連れて行って下さい」と頼まれた石光は、「大陸で働くのはお父さん一人でよい。将来も決して大陸へなんか行くんじゃないよ。——大陸に行くにしても、お父さんのように出発点を間違うと、どこまでも外れてしまってね、時間が経てば経つほど正道に戻れなくなってしまう。ものごとは初めが大切だよ」と長男を諭している。

石光は失意の晩年を送ったようだが、しかし本書の全体に描かれている彼の数奇な体験は、それだけで大陸をめぐる見事な裏面史である。「馬賊」の頭目に嫁いだ日本人女性は何人も出てくる。そして本学の前身・東洋語学専門学校の初代校長だった阿部野利恭（あべの りきょう）もしばしば顔を出す。

（本研究所研究員 嵯峨一郎 経営社会学）